The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「出土簡帛文獻與古代学術國際研討會」参加記
Author(s)	竹田, 健二
Citation	中国研究集刊. 2006, 40, p. 67-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　露号（総四十号）平成十八年六月　六七―七一頁

「出土簡帛文獻與古代学術國際研討會」参加記

竹田健二

二〇〇五年十二月二日から三日にかけて、台湾・国立政治大学の行政大楼を会場に「出土簡帛文獻與古代学術國際研討會」と題するシンポジウムが開催された。主催は、政治大学中国文学系・中央研究院文哲研究所・簡帛資料文哲研読会の三者で、その中でも中心的役割を果たしたのは、簡帛資料文哲研読会である。同会は、過去三年間にわたり郭店楚簡・上博楚簡を中心とする多数の出土資料の読解・検討を精力的に進め、また中国・日本などとの國際的な学術交流に積極的に取り組んでいる。

本シンポジウムでは、その簡帛資料文哲研読会のメンバーを中心に、招待された中国・日本の研究者と合わせて三十名が十のセッションに分かれて研究発表を行った。発表者の氏名とそれぞれの題目、及び司会者は、下記の通りである。

○十二月二日

・第一セッション　司会者：王文顔（政治大学）

謝君直（南華大学）「郭店楚簡〈窮達以時〉所蘊含的義命問題」

楊晉龍（中研院文哲所）「《五行篇》的研究與其引用《詩經》文本述論」

高莉芬（政治大学）「神聖的秩序：楚帛書甲篇與創世神話」

・第二セッション　司会者：周鳳五（台湾大学）

邱德修（静宜大学）「《上博》（四）〈楚昭王毀室〉簡「𦤎条之」」

朱淵清（上海大学）「《穆天子傳》的古本舊注」

陳　劍（復旦大学）「上博竹書《周易》異文選釋（六則）」

・第三セッション　司会者：葉國良（台湾大学）

林素清（中研院史語所）「上博四《內禮》篇重探」
王志楣（政治大学）「從物理学到形上学—導引術與莊子思想」
林義正（台湾大学）「論〈恆先〉的宇宙思維—基於內觀功夫的另一個詮釋」
・第四セッション　司会者：林義正（台湾大学）
郭梨華（東呉大学）「〈亙先〉與戰國道家哲学論題探究」
佐藤將之（台湾大学）「無「忠信」的國家不能生存—春秋戰國時代早期「忠」和「忠信」概念的意義」
末永高康（鹿兒島大学）「楚簡中所見性説—以《性自命出》爲中心」
・第五セッション　司会者：簡宗梧（逢甲大学）
張光裕（香港中文大学）「從簡帛所見「然句」看「句」、「后」、「後」諸字的關係」
袁國華（中研院史語所）「《上博楚竹書四・昭王毀室》字詞考釋」
大西克也（東京大学）「戰國楚系文字中的兩種「告」字—兼釋上博楚簡《容成氏》的「三告」」

○十二月三日

・第六セッション　司会者：曾春海（政治大学）
林明照（國科會人文学研究中心）「論〈恆先〉有無關係的哲学意涵」
洪燕梅（政治大学）「論《睡虎地秦簡》之法律現象—以長幼關係爲例」
林啓屏（政治大学）「中國古代学術史上的關鍵事件及其意義—以「秦火焚書」爲討論的起點」
・第七セッション　司会者：林慶彰（中研院文哲所）
林素英（台湾師範大学）「從〈詩論〉探究〈鄭風〉之禮教思想」
林碧玲（華梵大学）「《上博四・逸詩・交交鳴鳲》研究」
谷中信一（日本女子大学）「關於銀雀山漢墓竹簡《晏子》資料價値的探討—從出土文獻看傳世文獻」
・第八セッション　司会者：陳麗桂（台湾師範大学）
季旭昇（南台科技大学）「《上博三・仲弓》編聯語譯」
陳　偉（武漢大学）「上博楚竹書〈仲弓〉「季桓子」章集釋」
近藤浩之（北海道大学）「用簡帛文獻來新解釋的可能性—《孟子・萬章下》「其至爾力也，其中非爾力也」的解釋」
・第九セッション　司会者：董金裕（政治大学）
陳麗桂（台湾師範大学）「近年出土簡帛文獻看戰國楚道家的道論及其相關問題—以帛書〈道原〉、〈太一生水〉與〈亙先〉爲核心」

蔣秋華（中研院文哲所）「從上博簡《容成氏》之「四海」談起」

丁四新（武漢大学）「楚簡《容成氏》「禪讓」觀念論析」

・第十セッション　司会者：林啓屏（政治大学）

福田哲之（島根大学）「上博楚簡《内禮》的文獻性格—以與《大戴禮記・曾子立孝篇・曾子事父母篇》之比較爲中心」

菅本大二（梅花女子大学）「郭店楚簡《尊徳義》中的禮治思想—以荀子的禮治思想比較爲中心」

竹田健二（島根大学）「《曹沫之陳》中的竹簡綴合與契口」

発表の多くは、やはり近年中国古代研究に大きな衝撃を与えている郭店楚簡・上博楚簡に関するものだった(注1)。発表者の持ち時間は十五分、しかも質疑応答は、各セッションの三人の発表がすべて終わった後でまとめて行われた。このため、個々の発表についての会場における意見交換は、さほど十分には行われなかった。しかしながら、台湾・中国・日本の出土文献研究者が、一堂に会してそれぞれ最新の研究成果を発表したこと、そして会場の外においても様々な形で交流を深めたことは、極めて大きな意義がある。今後もこうした国際的な取り

第10セッションの模様

組みが積極的になされるならば、戦国楚簡研究は一層大きな成果を挙げることが可能であろう。開催に関わった関係者各位に、心より深く感謝申し上げたい。

ところで、筆者はこのシンポジウムに参加した際、『上海博物館蔵戦國楚竹書』（上海古籍出版社）の刊行に関する情報を、中国の研究者から得ることができた。

その一つは、『上海博物館蔵戦國楚竹書』第五分冊刊行に関するものである。訪台直前、武漢大学簡帛研究中心のホームページ(注2)上に、第五分冊が一月上旬に刊行されるとの情報が掲載された(注3)。そこで懇親会の際、復旦大学の陳剣氏や上海大学の朱淵清氏に、この情報は確かかどうか尋ねた所、二人とも間違いないと即答された。

周知の通り、一昨年の九月、『上海博物館蔵戦國楚竹書』の主編者である馬承源氏がお亡くなりになった。氏の没後、同書の刊行が順調に継続されるのかどうか、筆者は若干の不安を感じていた。しかし、インターネットを通して得られた情報に加えて、陳氏と朱氏から力強い言葉をお聞きしたことにより、そうした不安は払拭された。

もっとも、筆者が実際に第五分冊を入手したのは、二月末になってからであった(注4)。しかもその時点で、第五分冊中の文献に関する中国や台湾の研究者の論文が、武漢大学簡帛研究中心のホームページや「簡帛研究」のホームページ(注5)には、既に複数発表されていた。特に武漢大学簡帛研究中心のホームページには、三月上旬にかけて、一日に数本まとめて発表されることもあった。そのほとんどが札記の類であるとはいえ、今のところ第五分冊に関する研究は、中国・台湾が先行しているといえる。新出土資料に関して、公開直後にこうした現象が起きることは、今後も避けられまい。

シンポジウムで得られたもう一つの情報は、当初六冊と報じられていた『上海博物館蔵戦國楚竹書』の刊行が、八冊になるというものである。この話は、朱淵清氏からお聞きした。

上博楚簡には、完簡・残簡合わせて合計一二〇〇本余りの竹簡が存在するとされる(注6)。この内、第四分冊までで公開された完簡・残簡は四四四本(注7)、第五分冊に収められているものが約百二十本である。従って、『上海博物館蔵戦國楚竹書』の刊行が六冊で終わった場合、上博楚簡の公開は半数程度に止まることになる。八冊刊行されるならば、約三分の二程度まで公開されることになろう。それでも全体の公開には遠く及ばないが、少しでも公開が進むことは、今後の研究にとって極めて重要であり、喜ばしい限りである。

郭店楚簡・上博楚簡の出土は、わずか十年余り前のこ

とである。しかし、中国・台湾・日本などで精力的に研究が行われた結果、これまでにも既に大きな成果を上げてきている。進んで新しい情報を求めなければ、研究の最先端から脱落してしまう。今回のシンポジウムに参加し、改めてそう感じた。

注

(1) シンポジウムにおける発表の内、中国思想研究に関わるものについては、南湖珞桂「〃出土簡帛文獻與古代学術國際研討會〃思想研究論文」(武漢大学簡帛研究中心ホームページ、二〇〇五年十二月十一日)に紹介されている。

(2) http://www.bsm.org.cn/

(3) 秦志華「《上海博物館藏戰國楚竹書》(五)出版」(武漢大学簡帛研究中心ホームページ、二〇〇五年十一月二十四日)。

(4) 第五分冊の奥付によれば、刊行は二〇〇五年十二月である。

(5) http://www.jianbo.org/

(6) 一九九九年一月五日付け「文匯報」の記事、及び馬承源「前言:戰國楚竹書的發現保護和整理」(『上海博物館藏戰國楚竹書(一)』(上海古籍出版社、二〇〇一年一一月)所収)参照。

(7) 第一分冊一一二本、第二分冊一〇一本、第三分冊一〇七本、第四分冊一二四本。「「上博楚簡」解題—『上海博物館藏戰國楚竹書』(三)(四)所収文献」(『戰国楚簡研究二〇〇五』(『中国研究集刊』別冊特集号〈総38号〉、二〇〇五年一二月)所収)中の福田哲之「上海楚簡形制一覧表」による。